

# 「居場所」(安心できる人)を規定する要因

## —成人愛着スタイルによる検討—

(平成 27 年 8 月 31 日受付, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

### The determinants of *Ibasho* (The person who eases one's mind) : A study of Adult Attachment Style

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

岡村 季光

OKAMURA Toshimitsu

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

奈良教育大学教育学部進学教室

豊田 弘司

TOYOTA Hiroshi

Nara University of Education

Department of Psychology

キーワード：居場所 (安心できる人), 成人愛着スタイル, 青年期後期

**Abstract** : The purpose of this study had focused on the attachment style as a symbol of interpersonal relationships, and examined influential factors in the rating of *Ibasho* (The person who eases one's mind). 211 undergraduates and vocational college students (46 males, 115 females) were asked to respond to a questionnaire. As a result to analyzed Pearson correlation coefficients and Multiple linear regression, it had become clear that the secure; A type and ambivalent; C type for males and the ambivalent; C type and avoidant; A type for females are significant as predictor of the rating of *Ibasho* (The person who eases one's mind).

**Keywords** : *Ibasho* (The person who eases one's mind), Adult Attachment Style, late adolescence

## 1 はじめに

特に青年期にとって、居場所があると感じることは重要な問題である。文部省中学校課(1992)<sup>(15)</sup>は、他者との相互作用により“今、ここにいる自分”を確認し、「自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所」である「心の居場所」が重要であると提言している。

豊田・岡村(2001)<sup>(32)</sup>は、これまでの居場所に関する先行研究において、居場所と認知される要因として「精神的安定」(杉本・庄司, 2007)<sup>(27)</sup>が中核であること(中谷, 2011<sup>(17)</sup>; 岡村, 2015a<sup>(20)</sup>), 居場所の定義に「安

らぎを覚えたり、ほっとできるところ」(矢作, 2005)<sup>(34)</sup>が頻出して挙げられることから、「居場所」を「安心していられる場所」と定義づけた。さらに「居場所」は“時間(安心できる時)”, “空間(安心できる場所)”及び“人間(安心できる人)”という3つの要素があり、小沢(2000<sup>(24)</sup>, 2002<sup>(25)</sup>)の指摘から、「居場所」の構造は“時間”, “空間”及び“人間”の要因は並列的ではなく、人との関係が基礎になり、そこに時間・空間の要因が入ってくるのではないかと考えた。

また、「安心できる人」は選択の上位に“自分ひとり”“母親”“友人”が挙げられており(豊田・岡村, 2001)<sup>(32)</sup>, 選択のパターンを数量化Ⅲ類で分析した

結果, “自分”群, “家族”群, “友人・恋人”群に分類されることが明らかになった(岡村・豊田, 2004<sup>(23)</sup>; Okamura, 2008<sup>(18)</sup>)。さらに, “自分”群は他の2群と比べて対人関係の認識(豊田・岡村, 2002)<sup>(33)</sup> や自分自身の捉え方(岡村・豊田, 2002)<sup>(22)</sup> において差異があることが明らかとなった。

さて, 安心できる感覚という点において, 類似する概念として愛着(アタッチメント)がある。Bowlby (1977)<sup>(5)</sup> は, アタッチメントを「ある特定の他者に対して強い結び付きを形成する人間の傾向」と定義づけた(金政, 2003)<sup>(10)</sup>。アタッチメントの特徴として, 個体がある危機的状況に接し, あるいはまた, そうした危機を予知し, 恐れや不安の情動が強く喚起された時に, 特定の他個体への近接を通じて, 主観的な安全の感覚(felt security)を回復・維持しようする傾性(数井・遠藤, 2005)<sup>(12)</sup> がある。個体にとって主要なアタッチメント対象は, 危機が生じた際に逃げ込み保護を求める“確実な避難所(safe haven)”であると同時に, ひとたび個体の情動が静穏化した際には, 今度は, そこを拠点に外界に積極的に出ていくための“安全基地(secure base)”として機能することになる(遠藤, 2007)<sup>(8)</sup>。

また, Bowlby (1969/1982<sup>(3)</sup>, 1973<sup>(4)</sup>, 1980<sup>(6)</sup>) は, 自己や他者及び関係性一般に対して個体が抱く主観的確信やイメージを, アタッチメントに関する“内的作業モデル(internal working model)”という術語を持って概念化した。この内的作業モデルは, 心的な表象として, 人の生涯に亘るパーソナリティ発達やその適応性を考える上で, とりわけ重要であるという認識を有していた(遠藤, 2007)<sup>(8)</sup>。

乳幼児期では, 表象に内在化されたアタッチメント対象への期待や信念は, 個体とアタッチメント対象間(e.g. 幼児と養育者間)の相互作用における行動パターンとして表出され则认为られている(金政, 2003)<sup>(10)</sup>。Ainsworth, et al. (1978)<sup>(11)</sup> は, 幼児に母親と見知らぬ人との分離と再会を経験させ, 幼児の反応における行動パターンを見いだした。このパターンが愛着スタイルであり, 安定型(secure; B type), 回避型(avoidant; A type)及びアンビバレント型(ambivalent; C type)に分けられた。このような乳幼児期における愛着スタイルの違いは, 上述した個人内表象としての内的作業モデルを介在要因として, 青年期以降の個人の対人関係様式や社会的な適応性の発達の違いに影響を及ぼすとされている(金政, 2003)<sup>(10)</sup>。

上述の通り, アタッチメントの概念は本研究にお

ける「居場所」(安心できる人)のそれとは近いものがあるが, 他者とのかわりか自明であるか否かという点において相違がみられる。すなわち, 「居場所」(安心できる人)は他者のいずれかと“自分ひとり”という想定があるのに対し, アタッチメントの概念にはない。しかし, 「居場所」(安心できる人)とアタッチメントのパターンである愛着スタイルの関連を検討することは意義深い。

また, これまでの研究(例えば豊田・大賀・岡村, 2007)<sup>(31)</sup> は, 適応の指標である変数(孤独感等)を「安心できる人」の選択がどの程度予測できるかという検討を行った。一方, 「安心できる人」を予測する変数は未だ検討はしていない。

そこで, 本研究の目的として, 対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し, 「居場所」における安心できる程度の評定に与える影響を検討する。豊田・岡村(2002)<sup>(33)</sup> は「安心できる人」で“自分ひとり”を選択する者は他者との心理的距離をとる傾向にある結果を見いだした。また, 岡村(2015b)<sup>(21)</sup> は, 安心できる人の評定が全体的に低い者は他者との協同作業への肯定的な認識が低く, 他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。上述の先行研究から, 本研究の仮説として, 安心できる人の評定と回避型に関連があることが予想される。

なお, 愛着スタイルの測定には“アダルト・アタッチメント・インタビュー(Adult Attachment Interview: AAI)”(Main, Kaplan & Cassidy, 1985)<sup>(13)</sup> という面接手法と, 自己報告的な強制選択法(Hazan & Shaver, 1987)<sup>(9)</sup> あるいは多項目(Brennan, Clark & Shaver, 1998)<sup>(7)</sup> の質問紙法がある。本研究では戸田(1988)<sup>(28)</sup> の内的作業モデル<sup>1</sup>尺度を用いる。本尺度は, Hazan & Shaver (1987)<sup>(9)</sup> に記述されている各スタイルの特徴を複数の評定尺度に作り直し, さらにその他独自に収集, 作成した項目を含めた多項目の質問紙法である。戸田(1988)<sup>(28)</sup> の質問紙法による尺度はAAIよりも使用が簡便であり, 調査協力者の負担が少なくなることが期待できる。

1 愛着スタイルとは, 厳密には, 観察可能な愛着行動パターンのことであり, それらの行動パターンを形成している内的作業モデル(Internal Working Models; 観察できない)を意味するものではないが, 成人愛着研究の慣習に従って, “愛着スタイル”を“愛着の内的作業モデル”という意味で用いる(中尾・加藤, 2003)<sup>(15)</sup>。

## 2 方法

### 2.1 調査対象

調査対象者は大学生及び専門学校生 161 名(男子 46, 女子 115), 平均年齢は 21 歳 0 か月であった。

### 2.2 調査内容

a)「居場所」(安心できる人)評定 “あなたは以下の人と居る時に安心できますか。ここで用いている「安心できる」とは、ホッとする、落ち着く等という意味です。”という教示を行い、豊田・岡村(2001)<sup>(32)</sup>で頻出した上位の項目及び岡村・豊田(2004)<sup>(19)</sup>, Okamura(2008)<sup>(18)</sup>の結果を参考に“自分ひとり”“親”“友人”という場面をそれぞれ設定した。

b)内的作業モデル尺度 戸田(1988)<sup>(28)</sup>によって開発された尺度である。“安定”(例 私は知り合いがでしやすい方だ), “回避”(例 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある), “アンビバレント”(例 人に頼るのは好きではない)が各 6 項目ずつの計 18 項目からなっている。“安定”は、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在という表象を持つ。“回避”は、他者は拒否的で援助が期待できないことから、これを補完するためにきわめて自己充足的な存在という自己に関する表象を持つ。“アンビバレント”は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象を持ち、自己不安全感が強い(戸田, 2001)<sup>(29)</sup>。

上述に示す項目は B 4 判用紙に印刷された。

### 2.3 調査手続

筆者が担当している授業終了後に上述の調査用紙を配布し、集団的に実施された。

1)「居場所」(安心できる人)評定 上記 a) の調査項目について、“自分ひとり”“親”“友人”という場面それぞれに“5:とても安心できる”から“1:全く安心できない”の 5 件法で行った。

2)内的作業モデル尺度 上記 b) の調査項目について“5:とてもよくあてはまる”から“1:全くあてはまらない”の 5 件法で行った。

### 2.4 倫理的配慮

調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益

になることは決してないことを説明した。

## 3 結果と考察

3.1 「居場所」(安心できる人)評定 表 1 には安心できる人ごとに集計した結果が示されている。2 (性: 男・女)×3 (場面: “自分ひとり”“親”“友人”)の 2 要因分散分析を行った結果、性( $F(1,159)=4.35, p<.05$ )と安心できる人( $F(2,318)=4.62, p<.05$ )の主効果及び交互作用( $F(2,318)=4.34, p<.05$ )が有意であり、男子が女子より評定が低く、自分ひとりである場面が親や友人という場面より評定が低かった。また、単純主効果検定の結果、女子において自分ひとりである場面が親や友人という場面より評定が低く、男子では有意な差を見いだせなかった。これまでの研究においては、女子は他者という「居場所」を選択する傾向があり(豊田・岡村, 2001)<sup>(32)</sup>, 安心できる評定においても同様の傾向を示していた(岡村, 2014)<sup>(18)</sup>。よって、本研究の結果は先行研究を支持するものであり、結果は妥当なものであるといえよう。

表 1 「居場所」(安心できる人)評定

		安心できる人					
		自分ひとり		親		友人	
性別	<i>n</i>	<i>M</i>	( <i>SD</i> )	<i>M</i>	( <i>SD</i> )	<i>M</i>	( <i>SD</i> )
男子	46	3.91	(.98)	3.74	(.98)	4.09	(.78)
女子	115	3.81	(.93)	4.24	(.88)	4.26	(.69)
合計	161	3.84	(.94)	4.10	(.94)	4.21	(.72)

### 3.2 安心できる人評定と内的作業モデル尺度の相関(*r*)

表 2 には、安心できる人評定と愛着スタイル間の男女別相関係数(*r*)が示されている。男子では“安定”及び“アンビバレント”, 女子では“回避”において中程度の負の相関であった。よって、安心できる人の設定と回避型に関連があるという本研究の仮説は、女子のみに支持された。

男女により結果が異なるのは、青年期の依存と自立の過程における個人差があることが考えられる。増淵(海野)(20014)<sup>(14)</sup>は、ひとりで過ごすことへの不安から自立願望の芽生え、自立願望の達成へと至る可能性を指摘した。本研究の結果は、男子においてひとりで過ごすことへの不安を感じる者は、発達の途上にあるのかもしれない。また、男子における他者へのアンビバレントな表象と親への安心感における負の相関は、“親”を母親と想定していたならば妥当な結果と言えよう。一方、女子においては、男子に比して他者との

関係を積極的に求める傾向にあり、その傾性が本研究の結果に影響した可能性も考えられる。

表2 安心できる人評定と内的作業モデル尺度の相関( $r$ )

愛着スタイル	安心できる人		
	自分ひとり	親	友人
(男子)			
安定	-.49**	.30*	.25
アンビバレント	.17	-.44**	-.26
回避	.28	-.02	-.28
(女子)			
安定	.03	-.04	.15
アンビバレント	-.18	-.06	-.22
回避	.18	-.32**	-.33***

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$

**3.3 安心できる人を規定する要因** 上述したように、男子では安心できる人の評定と“安定”及び“アンビバレント”の相関が、女子は“回避”との相関が高かった。それ故、相関係数の比較的高かった内的作業モデル下位尺度を予測変数、安心できる程度を目的変数とする回帰分析を性別及び安心できる人ごとに行った結果を表3に示す。

男子において、“自分ひとり”は“安定”( $\beta = -.49$ ,  $R^2=.22$ )と、“親”は“アンビバレント”( $\beta = -.44$ ,  $R^2=.17$ )がそれぞれ予測変数として有意であった。内的作業モデルが安定型傾向を示す者は、“自分ひとり”への安心できる程度を低めるが、アンビバレント型傾向を示す者は、“親”への安心感を低めることが明らかになった。

女子において、“自分ひとり”は“アンビバレント”( $\beta = -.24$ )と“回避”( $\beta = .24$ )が予測変数として有意( $R^2=.07$ )であり、“親”( $\beta = -.32$ ,  $R^2=.09$ ), “友人”( $\beta = -.33$ ,  $R^2=.10$ )はいずれも“回避”のみが有意であった。これは女子において他者志向性の高い傾向が反映されたものと考えられる。また、島(2009)<sup>(26)</sup>は、対人関係に関連した情報の処理において、特に“回避”の影響を受けることが示唆された。本研究の結果は、女子において島(2009)<sup>(26)</sup>の結果と合致する結果であり、妥当であると言える。

上述の結果は、居場所によって愛着スタイルが安心できる程度に及ぼす効果が異なることを示している。それ故、安心できる程度を適応の指標とした場合には、愛着スタイルが適応に及ぼす効果に対して、居場所が調整変数として機能したことになる(豊田, 2014)<sup>(30)</sup>。

表3 安心できる人評定ごとの回帰分析

愛着スタイル	安心できる人					
	自分ひとり		親		友人	
	$\beta$	$t$	$\beta$	$t$	$\beta$	$t$
(男子)						
安定	-.49	-3.73***				
アンビバレント			-.44	-3.21**		
$R$	.49		.44			
$R^2$	.22		.17			
$F$	13.89***		10.33**			
(女子)						
アンビバレント	-.24	-2.53*				
回避	.24	2.53*	-.32	-3.57***	-.33	-3.75***
$R$	.29		.32		.33	
$R^2$	.07		.09		.10	
$F$	5.07**		12.74***		14.06***	

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$ , \*\*\*  $p<.001$

### 3.4 本研究の問題点と今後の課題

本研究は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し、安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果、男子において安定型とアンビバレント型が、女子においてアンビバレント型と回避型が予測変数として有意であることが明らかとなった。

本研究の問題点として、まず第1に安心できる人の評定の問題がある。本研究では、安心できる人の評定において、父親と母親を合わせて“親”とするなど、愛着スタイルが安心できる人のどの対象に影響を及ぼしているのか、詳細は明らかにできていない。今後は対人関係をより限定したかたちで安心できる人の評定における影響の有無を検討する必要がある。

第2に、愛着スタイル尺度の問題がある。本研究で用いた尺度は、多項目式の3カテゴリー尺度(戸田, 1988)<sup>(28)</sup>であった。しかし、今後は近年盛んに研究が進められている多項目式の2次元・4カテゴリー尺度も検討する必要がある。例えば、Bartholomew & Horowitz (1991)<sup>(2)</sup>は、青年・成人期の内的作業モデルが、自己ならびに他者への期待や信念という2つの作業モデル(愛着の2次元)が存在すること、さらに、それら2つの次元によって、青年・成人期の愛着スタイルは“安定型”(secure)、“とらわれ型”(preoccupied)、“回避型”(dismissing)、“恐怖型”(fearful)の4つに分類することが可能であることを示し(金政, 2007)<sup>(11)</sup>、Hazan & Shaver (1987)<sup>(9)</sup>との対応性を理論的に想定している(中尾・加藤, 2003)<sup>(16)</sup>。今後は3カテゴリー尺度及び2次元・4カテゴリー尺度の双方を検証する



ことが必要であろう。

## 引用文献

- (1) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum, 1978
- (2) Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244, 1991
- (3) Bowlby, J. *Attachment and Loss*, Vol. 1: *Attachment*. New York: Basic Books, 1982 (Original work published 1969)
- (4) Bowlby, J. *Attachment and Loss*, Vol.2: *Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books, 1973
- (5) Bowlby, J. The making and breaking of affectional bonds. I. A etiology and psychopathology in the light of attachment theory *The British Journal of Psychiatry*, 130, 201-210, 1977
- (6) Bowlby, J. *Attachment and Loss*, Vol. 3: *Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books, 1980
- (7) Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In Simpson, J. A., & Rholes, W. S. (Eds.) *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. pp.46-76, 1998
- (8) 遠藤利彦「アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する」数井みゆき・遠藤利彦(編著)『アタッチメントと臨床領域』ミネルヴァ書房 pp.1-58, 2007
- (9) Hazan, C., & Shaver, P. Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personal and Social Psychology*, 52, 511-524, 1987
- (10) 金政祐司「成人の愛着スタイル研究の外観と今後の展望」『対人社会心理学研究』, 3号, pp.73-84, 2003
- (11) 金政祐司「青年期の愛着スタイルと友人関係における適応性との関連」『社会心理学研究』, 22巻, pp.274-284, 2007
- (12) 数井みゆき・遠藤利彦『アタッチメント：生涯にわたる絆』ミネルヴァ書房, 2005
- (13) Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. Security in infancy, childhood, and adulthood: a move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104, 1985
- (14) 増淵(海野)裕子「大学生における「ひとりの時間」の検討および自我同一性との関連」『青年心理学研究』, 25巻, pp.105-123, 2014
- (15) 文部省中学校課「登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告)」『教育委員会月報』, 44巻, pp.25-29, 1992
- (16) 中尾達馬・加藤和生「成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか?—4 カテゴリー(強制選択式, 多項目式)と3 カテゴリー(多項目式)との対応性—」『九州大学心理学研究』, 4巻, pp.57-66, 2003
- (17) 中谷陽輔「居場所を感じる自己」榎本博明(編著)『自己心理学の最先端：自己の構造と機能を科学する』あいり出版 pp.141-151, 2011
- (18) Okamura, T. Classification of *Ibasho* "Person who eases your mind" in female undergraduates, Poster presented at XXIX International Congress of Psychology, Berlin, July 21-25, 2008
- (19) 岡村季光「「居場所」(安心できる人)とひとりで過ごす感情・評価の関係」『奈良学園大学研究紀要』, 1集, pp.191-197, 2014
- (20) 岡村季光「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」梶田叡一(責任編集)・人間教育研究協議会(編)『実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA型学力をどう育てるか(教育フォーラム55)』金子書房 pp.111-121, 2015a
- (21) 岡村季光「「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討—「安心できる人」評定, ひとりで過ごす感情・評価及び協同作業認識尺度の関係から—」『日本教育心理学会第57回総会発表論文集』, p.683, 2015b
- (22) 岡村季光・豊田弘司「大学生における『居場所』の個人差の検討(2)～自己意識及びエゴグラムとの関係から～」『日本発達心理学会第13回大会発表論文集』, p.321, 2002
- (23) 岡村季光・豊田弘司「青年期後期の「安心できる人」を類型化する試み」『日本発達心理学会第15回大会発表論文集』 p.79, 2004
- (24) 小沢一仁「自己理解・アイデンティティ・居場所」『東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編』, 23巻2号, pp.94-106, 2000
- (25) 小沢一仁「居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み」『東京工芸大学

工学部紀要 人文・社会編』, 25 巻 2 号, pp.30-40, 2002

- (26) 島 義弘「愛着の内的作業モデルが対人情報処理に及ぼす影響：語彙判断課題による検討」『パーソナリティ研究』, 18 巻, pp.75-84, 2010
- (27) 杉本希映・庄司一子「子どもの「居場所」研究の動向と課題」『カウンセリング研究』, 40 巻, pp.81-91, 2007
- (28) 戸田弘二「青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説(working models)からの検討」『日本心理学会第 52 回大会発表論文集』, p.27, 1988
- (29) 戸田弘二「信頼感・愛着」堀洋道(監修) 吉田富二雄(編)『心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観>』サイエンス社 pp.98-117, 2001
- (30) 豊田弘司「愛着スタイル, 情動知能及び自尊心の関係」『奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要』, 23 巻, pp.1-6, 2014
- (31) 豊田弘司・大賀香織・岡村季光「居場所(「安心できる人」と情動知能が孤独感に及ぼす効果」『奈良教育大学紀要』, 56 巻, pp.41-45, 2007
- (32) 豊田弘司・岡村季光「大学生における『居場所』」『奈良教育大学教育研究所紀要』, 37 巻, pp.37-42, 2001
- (33) 豊田弘司・岡村季光「大学生における『居場所』の個人差の検討(1)対人関係の認識の関係から～」『日本発達心理学会第 13 回大会発表論文集』, p.320, 2002
- (34) 矢作博美「子ども・若者における「居場所」に関する研究の概観」『聖マリアンナ医学研究誌』, 5 巻, pp.121-126, 2005